

## S序章 日本語構造伝達文法について

この章では簡単に日本語構造伝達文法の紹介をします。

S序.1 日本語構造伝達文法について (2)

- ・ 基本的考え方を述べます。
- ・ 構造モデル4実例……立体モデルと簡略モデルで示します。

S序.2 4著作 (4)

- ・ 日本語構造伝達文法の4著作を紹介し、全体像を示します。

S序.1 日本語構造伝達文法について

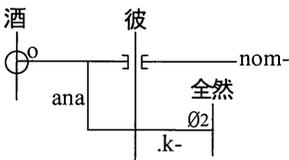
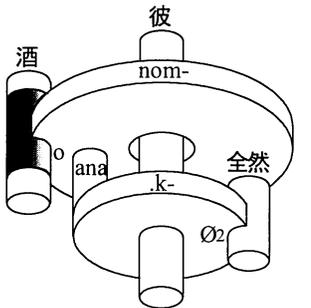
基本的考え方

日本語のさまざまな現象を的確に説明するために、文法を化学のような科学にします。そのため、日本語を可能な限り細かく分析して最小の単位体を見だし、それらがどのように判断の構造体を形成し、どのように文として描写されるかを研究します。また、時間・条件のモデルも使います。このような原則での研究の結果、多くの文法現象が説明できるようになってきています。

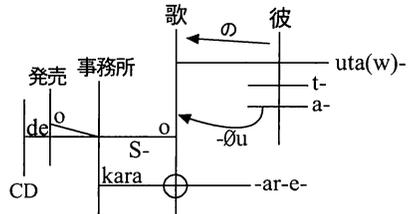
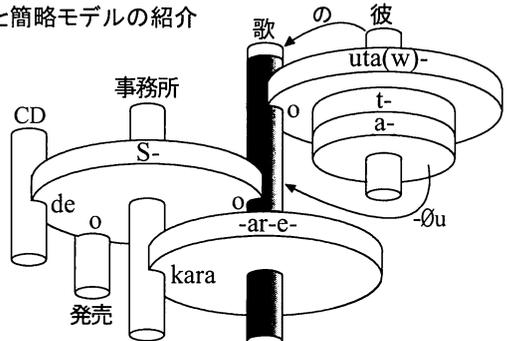
膨大な研究成果の蓄積のある国語学や日本語教育学からは多くを吸収しています。初期の生成文法のように表層と深層を設定しています。深層構造の確実性の確保や諸概念についての定義が非常に重要であると考えています。認知言語学のように概念をモデル化して把握しやすくすることの重要性を認識しています。

日本語はモンゴル語のようなアルタイ型言語の一員です。文法的要素は順次付加されていき、要素として捉えやすく、透明性の高いものとなっています。日本語は、構造の考えやすい、研究のしやすい言語であるといえます。また、日本語は歴史的にも語順等、文法要素の変化しにくい安定した言語であるといえます。

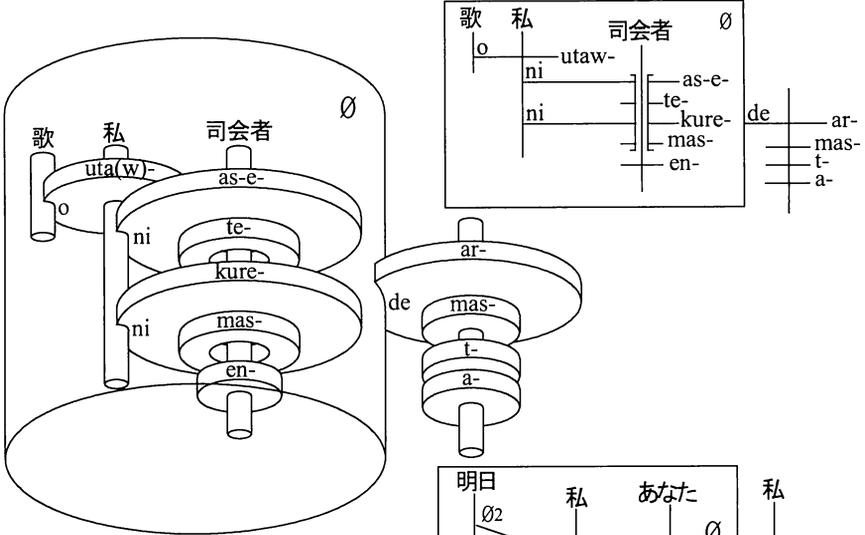
構造モデルの例 立体モデルと簡略モデルの紹介



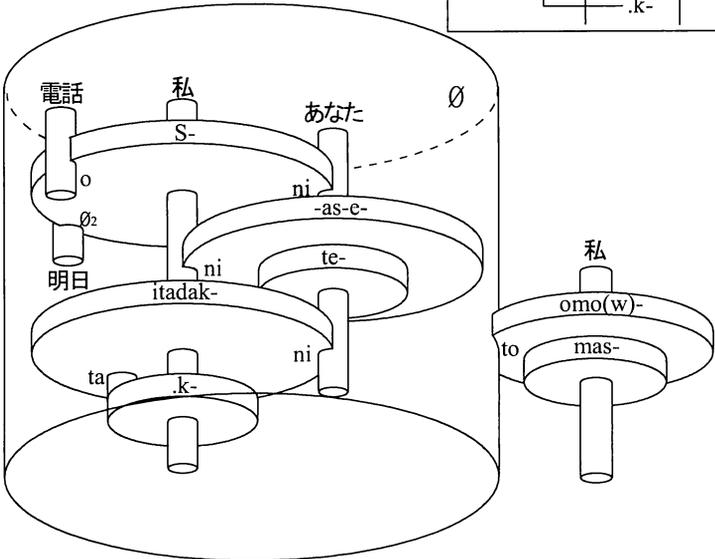
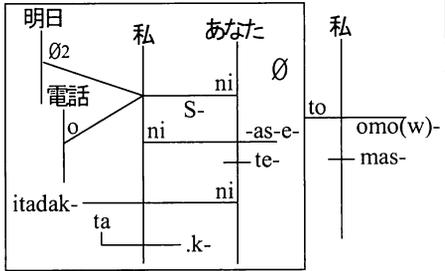
図S序1 彼、酒は全然飲まない



図S序2 彼の歌った歌は事務所からCDで発売される



図S序3 司会者は歌を  
歌わせてくれませんでした



図S序4 明日電話をさせていただきたいと思います

S序.2 4著作

4著作①～④の内容を紹介します。

①『日本語構造伝達文法』

2000年版, 2005年改訂版, 2012年改訂版  
摇篮社

本書は「日本語構造伝達文法」4冊本の1冊目で、基本的な考え方を示しています。第Ⅰ部では構造モデルをどのように設定するかについて述べ、第Ⅱ部では構造を形成する諸要素について述べます。第Ⅲ部ではレル・ラレルなどの態について、第Ⅳ部、第Ⅴ部では時間関係の捉え方について説明し、第Ⅵ部ではアル・イルについて述べます。第Ⅶ部は複主体（複主語）について、第Ⅷ部～第Ⅺ部は否定について、第Ⅻ部は「の」について述べ、第ⅩⅢ部は諸題を扱います。

本書は2000年版が初版です。その後2005年と2012年に改訂版を出しましたが、用語の小さな修正などにとどめ、章立ては変化していません。

第Ⅰ部 構造モデル

- 第1章 構造モデル
- 第2章 格・表示法
- 第3章 相対化描写と主語・客語
- 第4章 構造描写

第Ⅱ部 要素分類

- 第5章 要素分類(品詞分類)
- 第6章 実体(実詞)
- 第7章 動詞
- 第8章 形容詞
- 第9章 描写詞
- 第10章 助動詞
- 第11章 断定基

第Ⅲ部 態(ヴォイス)

- 第12章 態(ヴォイス)

第Ⅳ部 アスペクト(局面指示体系)

- 第13章 アスペクト(局面指示体系)
- 第14章 繰り返しのアスペクト
- 第15章 補助アスペクト

第Ⅴ部 テンスとアスペクト(時と局面)

- 第16章 テンスとアスペクト(時と局面)
- 第17章 数字で表すテンスとアスペクト

第VI部 「ある」と「いる」

第18章 「ある」と「いる」

第VII部 複主体

第19章 単位構造を属性とする構造

第20章 複主体が同一属性に立つ構造

第21章 態複主体／上置きあり複主体

第VIII部 否定(1) 時空否定

第22章 否定は時空を空にする

第23章 否定の時間的側面

第24章 過去・現在指向の未来形

第25章 「ご飯食べた？」への否定回答

第IX部 否定(2) 否定基本構造と描写

第26章 否定の構造

第27章 主体に関わる否定描写

第28章 客体に関わる否定描写

第29章 描写法の組合せ

第X部 否定(3) 否定構造

第30章 「ある」の否定はなぜ「ない」か

第31章 「だ・である・です」の否定構造

第32章 形容詞の否定構造

第XI部 否定(4) 否定諸題

第33章 構造の一部訂正を要求する否定「～んじゃない」

第34章 否定属性に直接関わる客体

第35章 諸題

第XII部 「の」

第36章 「の」

第37章 「の」諸題

第XIII部 諸題

第38章 数量実詞

第39章 やりもらい

第40章 高校生に

第41章 「日本語構造伝達文法」の誕生

第42章 特殊な包含実体

## ②『日本語構造伝達文法 発展A』

2003年発行 揺籃社

本書は前著『日本語構造伝達文法』に引き続き、本文法理論の基本的な考え方について述べています。「主格・を格」について説明し、動詞テ形の音便化現象を音声学的に説明し、動詞タ形が局面変化の完了を認知するものであることを述べます。本文法での条件表現、絶対テンス・相対テンス、従属節の捉え方なども述べます。AⅧ部には構造理解のために、前著に出現した構造を整理して載せました。

## AⅠ部 主格, を格

A 1 章 主格の下位分類

A 2 章 を格

## AⅡ部 テ, タ

A 3 章 動詞音便化の原則

A 4 章 局面変化完了認知基 タ

## AⅢ部 複文(1) 条件表現(1)

A 5 章 出来事生起の確実性

A 6 章 バの構造と意味

A 7 章 条件

A 8 章 タラの構造と意味

## AⅣ部 複文(2) まえ・あと・とき

A 9 章 絶対テンスと相対テンス

A 10 章 複文のテンスとアスペクト

A 11 章 「とき」の特性

## AⅤ部 複文(3) 従文のテンスとアスペクト

A 12 章 実体修飾の時相的側面

A 13 章 従文内容を出来事的に把握する

A 14 章 従文内容を質的に把握する

A 15 章 従文が形容詞文である場合

## AⅥ部 複文(4) 実体修飾法(1)

A 16 章 第1修飾法

## AⅦ部 諸題

A 17 章 構造形成力

A 18 章 多義文の構造

A 19 章 諸構造

## AⅧ部 構造練習帳(1)

③『日本語態構造の研究 -日本語構造伝達文法 発展B-』

2009 年発行  
晃洋書房

本書は日本語における態の存在とその構造・様相を明らかにすることを目的としています。態は日本語において非常に重要な役割を果たしており、これを正確に把握することにより日本語を歴史的にも正確に理解できるようになります。

**B I 部 原因態・許容態**

本文法の命名する「許容態-e-」のあり方を「原因態-as-」とともに論じます。

**B 1 章 出来事は4種類**

出来事(事象)が主体の「意志」と「制御性」によって4種類に分類されます。

**B 2 章 原因態 -(s)as-**

「原因態 -(s)as-」が4種類に大別され、さらに 10 種類に分類されます。

**B 3 章 許容態 -e-**

「許容態」が他動・自然生起・可能・態補強の4機能を持つことを述べます。

**B 4 章 複合原因態 -(s)as-e-**

「複合原因態 -(s)as-e-」が、態補強・可能・両方を表すことを述べます。

**B II 部 許容態の語幹化（二段・一段化）**

二段活用の発生と一段化が許容態の存在と関わっていることを述べます。

**B 5 章 動詞二段活用の発生と一段化**

動詞二段活用をもたらしたのは許容態であること、  
二段活用の一段化は、許容態 3 形式の -e- 形式への統合現象であること、  
古語における許容態 -ur- 形式は本研究での発見であること、を述べます。

**B 6 章 許容態の音声的前提**

考察の前提として、古代日本語が 5 母音であったことを述べます。

**B 7 章 許容態の発生と展開**

B 5 章で述べたことについて詳しく述べます。  
許容態がいかにして発生し、いかにして動詞語幹に取り込まれたか、  
許容態がいかにして現代の活用形式に至ったか、について述べます。

**B III 部 態拡張による新動詞の発生**

動詞が態形式の適用を受けて数を増して今日に至っていることを述べます。

**B 8 章 動詞態拡張 24 方式**

動詞の態拡張に 24 方式があることを図表で示しつつ述べます。

**B 9 章 動詞態拡張各方式**

動詞態拡張の 24 方式それぞれにつき細かく検討します。

④『主語と時相と活用と —日本語構造伝達文法 発展C—』

2014年発行  
揺籃社

本書では日本語の主語・二重主語，うなぎ文について整理し，活用の新しい捉え方，接続という力，挨拶表現の構造，時相，モダリティについて述べます。

C I 部 日本語構造の基本

C 1 章 日本語の主語

主語・二重主語の実相について，立体構造モデルを用いて説明します。

C 2 章 疲れる文（因果の複主体）

二重主語文「君の話は疲れる。」が因果の複主体構造を持つことを述べます。

C 3 章 同格複実体描写

複数の実体(名詞)が同じ格にある場合の描写法を3種類に分けて述べます。

C 4 章 うなぎ文（形式断定基）

うなぎ文「ぼくはうなぎだ。」の「だ」が形式的補充であることを述べます。

C 5 章 活用

活用とは動詞・形容詞に形態素が付加される現象であることを述べます。

C II 部 日本語慣用構造

C 6 章 接続の構造(1) (理流・論流)

2文接続時の順接・逆接などを「理流，論流」の概念を用いて説明します。

C 7 章 接続の構造(2) (接続力)

接続詞・接続助詞がなぜ接続の力を持つのかについて説明します。

C 8 章 挨拶表現の構造

日常の挨拶表現につき文法的構造をモデルで示して理解を深めます。

C III 部 日本語の時相

C 9 章 古代語の時相

「つ，ぬ，り，たり」「き，けり」等のテンス・アスペクトを図で解明します。

C 10 章 日常の中の時相 (1)

日常の発話文中にあるテンス・アスペクトの原理を示します。

C 11 章 日常の中の時相 (2)

実際の発話具体例に当たりながら分析法・図示法を示します。

C IV 部 発話

C 12 章 発話構成6要素

発話が6要素で構成されるものとし，理解しやすく図示します。